しんしんと冴えわたる、美しき冬の京都へ出かけよう

KYOTO

季刊京都
2010-11
WINTER
No.6
880 yen

澄みきった冬の京都にて。

京都暮らしのお買物
ギャラリーショップ
キョウトのデザイン〈市松〉
商店街にようこそ。
北野商店街

聖なる季節は
教会と洋館でロマンティックに。
恋する乙女の京都日記

京都でデビュー
あこがれの舞妓さんと♡
お座敷はじめ

古都に息づく美が凝縮された
容姿端麗 京の洋菓子

あったか冬グルメ

京都のおせち

いつもとは違う冬景色が
広がっていました

おはよう、こんばんは。都の朝と夜

冬の朝、京都いちばんのり
ごきげんな京都は朝食からはじまる
早朝市場で三文の得
KYOTO夜景彷徨
街灯りきらめくダイニング＆バー

御利益巡り

聖地巡礼 お悩み別御利益処方箋
守り本尊 都七福神巡り…

京都最新ニューオープン情報

相伝の味・老舗が伝える逸品料理
いもぼう平野家本家

匠の技・京の手しごと
日吉屋の京和傘

とりはずして使える
京都
物見遊山手帖
＋
地図
付

成美堂出版

京の手しごと

匠の技に会いに行く。

第6回

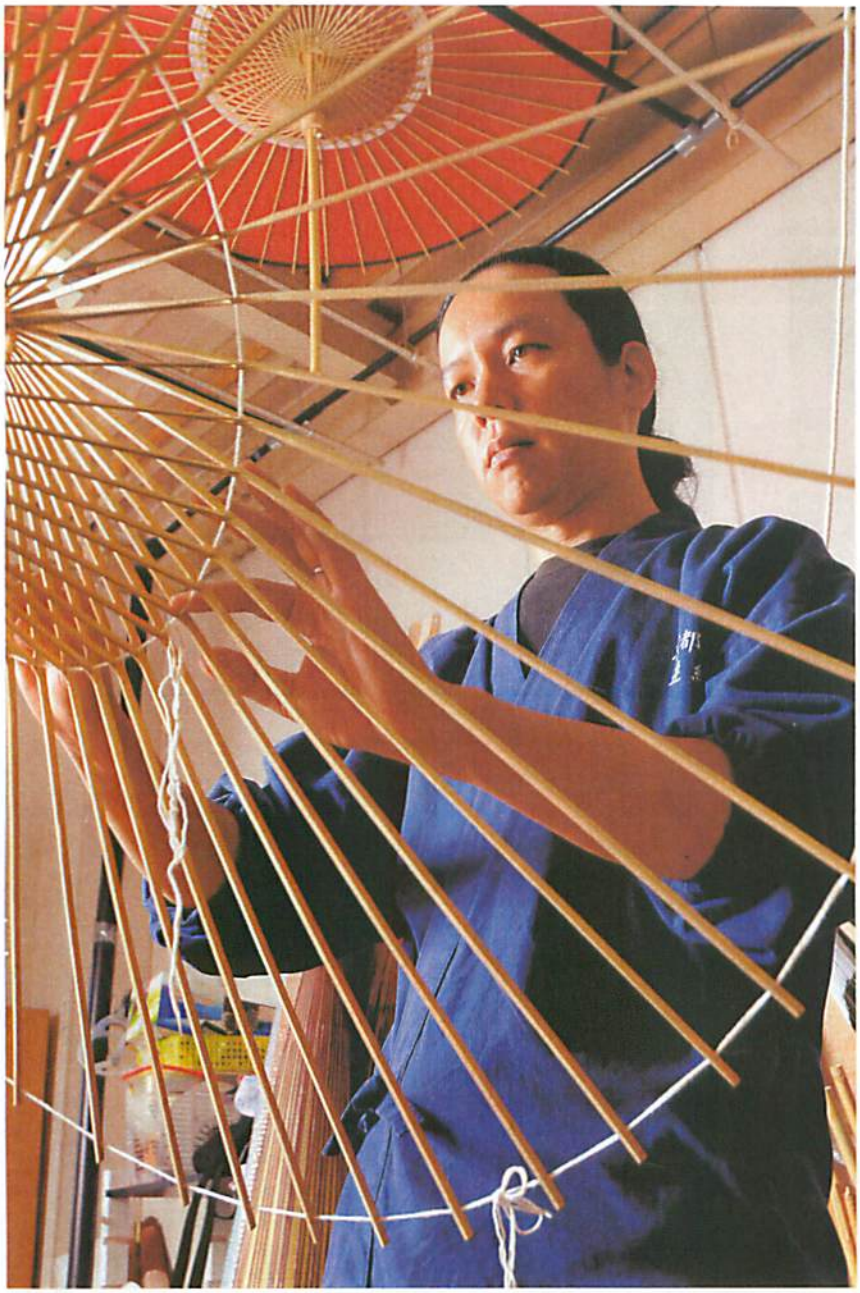
上から見た形が「蛇の目」に似ていることから蛇の目傘と呼ばれる。番傘より細身で軽く糸飾りなどが施されて、舞妓さんの愛用も多い。デザインは無地と白抜きがあり、色は伝統的な赤と紫の2色だが、オーダーメイドもできる。大きさは1.9尺(直径約1.1m)で、骨目は44本。表面は亜麻仁油で防水処理されている。2万9400円〜

京和傘

日吉屋
西堀 耕太郎さん

「日吉屋」は江戸時代創業の京都唯一の和傘製造元。公務員から職人へと転身した5代目は「伝統は革新の連続」との信念のもと、伝統的な京和傘を手がけるなか、和風照明など新分野を開拓し、京和傘の可能性を追求し続けている。

「和傘文化に新たな命を吹き込み、世界ブランドを目ざす」



取材・文／鳴海 圭子　撮影／馬場 裕

京都で唯一残った老舗の和傘店

伝統工芸を途絶えさすのはあまりにももったいない

“雨雨ふれふれ母さんが～蛇の目でお迎えうれしいな～”と童謡でも歌われる蛇の目傘。今では日用品とはいえなくなった蛇の目傘や番傘だが、明治時代には京都でも200あまりの和傘の小売店があったという。洋装化にともなう洋傘の普及で激減し、現在は「日吉屋」のみが和傘製造元として気炎を吐く。

日吉屋の5代目西堀耕太郎さんは、「11年前の結婚を機に公務員を辞めて妻の実家の家業である和傘職人になると言ったら、周りの人はみんな大反対。安定した仕事を捨てて、廃業寸前の京和傘の世界にわざわざ飛び込むことはないと。でも京和傘を目の当たりにして、この伝統技術を途絶えさすのはあまりにももったいないと思ったんです。日吉屋は江戸時代後期の創業で茶道家元の御用達でもある老舗。売れないのは京和傘の良さを伝えてないからで、ある意味ニッチ産業ですし、インターネットを活用すれば、独自性を持つ伝統産業は将来いけると踏んだんです」と、当時を振り返る。

京和傘の技術・構造を生かすグローバル・老舗ベンチャー

1 防水の必要のある和傘の表面に亜麻仁油を塗る。そのあと天日で数日～2週間程度干す。店の向かいのお寺の境内で天日干しすることも。2 骨組みの準備。親骨、小骨は細く割いた竹に糸を通すための穴などが開けられて下処理されている。3 傘骨の本数に合わせて溝が彫られているロクロに竹骨を差し込み、開閉できる骨組みを作る。4 親骨と小骨の穴を合わせ、糸をよりながら結びつける。5 型紙に合わせて和紙を裁断し、タピオカ粉を原料としたのりで和紙を張り付けていく。6 姿付け。張り終わった傘を乾燥させ、渦巻き状に折り畳めるように手と工具で折り目をつける。7 野点傘や蛇の目傘などには、小骨の周囲に色とりどりの飾り糸を施し、傘の先端の「かっぱ」などを取り付けて完成となる

傘骨の数ほどある工程で〝骨の折れる〟京和傘作り

西堀さんの和傘職人への道は、実家のある和歌山県新宮市から京都の日吉屋の工房まで通うことから始まった。

「結婚前、まだ公務員で土日しか通えなかった頃は4代目の義母やベテランの職人さんに手ほどきしてもらいました。あとはビデオを回して、工程から手元など何度も繰り返し見てはまねました。当時は車での行き帰りが長く感じられて、京都も和傘職人への道も遠かったですね」

京和傘制作は傘骨の数ほど工程があるといわれる。洋傘なら通常8本という骨数に対して蛇の目傘なら40本から組まれる骨組みから始まる。竹の柄に木製のロクロを天頂部につけて竹を細く割いた親骨を差し込み、もう一対の手元で傘を開閉させるためのロクロには子骨を組み合わせ、綿糸で親骨と小骨を1本1本結びつけて傘の骨格を作る。次に和紙を張っていくが、色違いの和紙は紙の継ぎ目が見えぬように張っていく。直径1・5～3mもある本式野点傘の特徴である赤白、緑白の2色段張りは、熟練の技でしかできない。張り終えたら防水用の亜麻仁油を引いて天日干しをする。その後、手元の石突やトップの頭紙（かっぱ）、小骨に飾り糸などを施して仕上げる。岐阜真竹、京銘竹や越前、五箇山、美濃の和紙にタピオカを使った自家製のりなど自然素材にこだわり、制作期間は数週間から数カ月と和傘の種類によって大きく異なる。

当時はハイテク？唐傘はからくりの傘

和傘は別名「唐傘」とも呼ばれるが、中国の唐から来たという説と「からくりの傘」が語源という説があるという。傘の柄を上下する2つのロクロで、和紙を張った骨を自在に開閉できる仕組みはまるでからくりのような傘ということで「からかさ」になったとか。

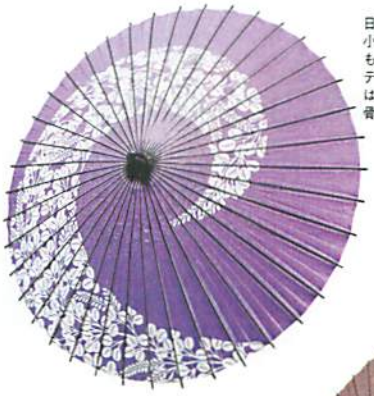
もともと傘は平安時代以前に中国より伝来したといわれる。当時の傘は雨具ではなく、貴人の日除けや魔除け、権威の象徴として使用されたもので、傘は開いたままで開閉するものではなかった。傘が開閉できるようになったのは安土桃山時代の頃とされ、登場した当時は今でいう斬新なハイテクに思えたのかもしれない。

傘は時代につれ形状や用途が変化し、機能もグレードアップした。コンパクトに畳めて持ち運べるようになり、祭礼や茶道などの伝統文化や歌舞伎や舞踊など伝統芸能と結びつき、美しい意匠を凝らし、粋や侘びさびをも表現する工芸品となった。映画や時代劇で浪人が傘張りの内職をしている場面などがよくあるが、和傘が庶民に普及したのは江戸時代中期からである。西堀さんが初めて奥さんの実家で見た番傘は渋くて魅力的だったという。「明治以降、和傘が廃れたのは洋傘の普及のせいばかりではなく、ずっと伝統産業として守りに入って攻めなかったからではないか」と、修業を積むうちにふつふつと胸に迫ってきたという。

蛇の目傘の内側に施された色とりどりの飾り糸

京和傘の技術・構造を生かすメイドイン・ジャパンの

（上）「古都里-KOTORI-」自立式スタンド。和傘のように開閉ができるためコンパクトに収納でき、ギフトにもできる。3万9900円
（左）最初に開発された「古都里-KOTORI-」ペンダント型照明器具。和紙は平安時代の女房たちが恋文をしたためたという王朝紙（おうちょうし）。色和紙は五箇山和紙を使用しているためやわらかな光を演出する。1万9950円～



日本舞踊や民謡で使われる小ぶりの舞傘は日傘としても利用できる。紫の花鳴のデザインが華やか。大きさは1.4尺（直径約82cm）で、骨目は40本。7350円～

男性に似合う番傘は竹と和紙だけの素材でがっしりとした構造。大きさは1.9尺（直径約1.1m）で、骨目は48本。2万6250円～

桜の花びらが散らされた和紙日傘（舞傘）。大きさは1.4尺（直径約82cm）で、骨目は40本。柄は黒塗り仕上げの木製。広げると小骨周りに施された糸かがりが美しい。7350円～

西堀 耕太郎 さん
にしぼり こうたろう
1974年和歌山県生まれ。2004年、日吉屋5代目当主を継承。和傘の制作・文化財の修復などに加え、和傘の伝統技術を生かした革新的な製品開発を手がける。和風照明「古都里-KOTORI-」は2006年の発表以来、国内外で注目を浴びている。

京和傘の伝統を守るため 和風照明器具を開発

平成16年（2004）に日吉屋の5代目を継承した西堀さんは「伝統工芸を守るためには革新を繰り返さなければならない」という信念のもと、和傘の技を生かした新商品の開発に乗り出した。

「和傘を広く知ってもらおうと、インターネット・ショップなどを利用し、それなりに手応えはあったのですが、伝統的な野点傘や雨傘・日傘などはある程度市場が決まっており、企業として飛躍的な成長は望めません。そこで、和傘の技術で現代生活のなかで活用できるものを」と、西堀さんは考えて照明器具に着目した。もともと和傘と提灯は素材も技術も似ている。和紙越しに透ける光がやわらかで明かりが揺れるたびに変わる竹のシルエットや影も情緒的だ。平成17年に、傘そのものの中に電球を入れた商品を発表したがデザイン的に失敗。試行錯誤の末、照明デザイナーたちとともに開発したのが、和風照明器具「古都里-KOTORI-」だった。

和傘の形状を残しつつ、本来2つあるロクロをひとつにして柄を取り外した円柱型のデザインを考案。幾何学的な竹骨の意匠と和紙からもれるやわらかな明かりを特徴とした、開閉できる斬新なランプシェードの誕生であった。

京都から世界へ羽ばたく 京和傘の新しい伝統

「古都里-KOTORI-」の商品名は西堀さんの娘さんの名前と同じ読み方で、京都から広く世界へ羽ばたいてほしいという願いがあったという。平成18年の発売を機に、国内外のデザイン賞を数多く受賞し、現在はドイツ、スペイン、イギリス、フランス、スイスなどに輸出する機会も増え、さらに欧州から米国も視野に入れている。

最近は和傘の工房と別に照明ショールームも開設し、国内外のデザイナーやアーティストとコラボレートした作品にも取り組んでいる。平成22年6月には「古都里-KOTORI-」をさらに進化させた金属フレームのスタイリッシュな「MOTO」を発表した。

「伝統工芸は喜んで使ってくれる人がいないと廃れます。海外の見本市などでプレゼンすると、インテリアに対する関心度の高さからかなりの注目度です。多彩な和紙からの光の透過を面白がる人が多いんです。和傘の構造や伝統美を照明に転用することで、長年培われた伝統技術も残すことになる。さらに和傘を含めた和の文化を世界中に浸透させていけたら」と夢を語る西堀さんによって、新しい京和傘の伝統が創造されようとしている。

日吉屋
ひよしや
075-441-6644
堀川寺之内 MAP 付録P.25 B-1
所 京都市上京区寺之内通堀川東入ル百々町546（宝鏡寺門前） 交 市バス9・快9・12・67 堀川寺ノ内から徒歩1分 営 10:00～18:00 体験工房10:00～17:00（要予約） 休 無休、体験工房は土曜 HP http://www.wagasa.com/

蛇の目傘の色とりどり